

『歪』

作者 淺羽 一

人間がパズルのピースに喩えられるなら、きつと世界には互いにぴたりと繋がれる相手がいるはずで、或いはそれが「運命」なんて言葉遊びの根源なんだと思う。

そう、誰だって幸せに、それも変に傷ついたり無理したりしなくても自然と幸せになれる相手がいるはずなのだ、だってそれくらいにパズルのピースは有限ながら無限に近い。

それなのに、どうして、と泣きそうになるのは、つまりそれこそが「運命」なんて言葉遊びで誤魔化さざるを得ない現実の厳しさなのかも知れない。

要するに、言いたいことは単純なのだ。君みたいな子がどうしてあんな奴と、何でこんな風になっちゃうんだろ、俺なら幸せにしてやるのに、もっと早くあなたと出会えていられたなら、なんて話が多すぎる。

例えば、あの子とこの子を交換して、あの人とこの人を入れ替えれば、まさしくそれぞれにとって理想通りの関係を築けるに違いないのに、そんな風に考えてしまう恋人達が自分の周りだけを見ても大勢いる。もしくは、どう考えてもその子自身に不幸を背負わなければならぬ理由なんて無いはずなのに、辛い辛いと泣きながらも相手の言いなりになり続けている子もいる。

結局はさ、そいつが選んでるんだよ。

言ってしまったえばその通りなのだ。本当に嫌なら離ればいいし、相手のせいそれが叶わないなら第三者に助けを求めればいい。夫婦喧嘩は犬も食わぬとか民事不介入なんて極論すれば言い訳に過ぎない。本気で考えれば打開策はそれなりにある。勿論、相応の代償を必要とする場合もあるだろうけれど、それでも延々と不幸と絶望を繰り返す毎日よりは多少なりとマシだろう。

それなのに、いつまでもずるずると関係を引きずるのは、「それって本当はお前自身が望んでるんだろ」と冷めた意見を突きつけられても仕方のない行為だと思われても無理はない。

でも、果たしてそれは本当の「好き」なのか。いや、こう言った方が良いかも知れない、それは本当にその人自身が望む「恋愛」の形なのか。

「もういい加減、別れるよ」

思い切り抱き締めてそう言った僕に、彼女は涙を流しながらも確かに頷いた。けれど、そのすぐ後で「でも、やっぱり…」。

こんなやりとりを繰り返したのは、果たして何度だっただろう。彼女はいつも泣いていたし、稀に笑っていると思ってもそれは自虐を口にしながらの泣き笑いめいたものばかりだった。

「別れるべきなんだろうなって分かってる。でも、今もし私が離れたら、あの子どうなっ
てしまうか分からないし…」

傷ついた心と体を慰めて欲しくて僕を呼ぶくせに、彼女は決まって最後にこう言った。そして何とか説得して別れる事を約束させても、翌日、はたまた翌々日、改めて彼と一緒にいる彼女を見ると暗い表情を浮かべつつもそれに寄り添って歩いていった。

お前はさ、便利に使われてるだけなんだよ。

言われずともその通りなのだ。だけど、事実として彼女は他の誰でもなく僕に助けを求めてきたし、一度だけ、そんな関係を少しでも変えようとその声を無視した時は、彼女はあろう事か他の誰かを捜すより先に己の手首で剃刀を引いた。結局、それ以来、僕はこの

ままでは駄目だと頭で理解しているくせに求められれば駆けつけたし、彼女もまたそれを理解しているからこそ以前にも増して僕にすがった——いや、僕の向こうに理想を観た。そして僕は自分を殺して理想を演じた。

彼は彼女の心を殺して、彼女は僕の存在を殺して、だからこそ僕は……。

共依存、ストックホルム症候群、強迫観念、洗脳、仲間意識、はたまた単なる恐怖感、それとも同情心……。何だって構わない。重要なことは、それらはどれもきつと恋愛と呼べる物に相応しい単語ではないと言うことだ。少なくとも、ごく一般的に話題に上る「恋愛」の意味を辞書で引いても同義語にそんな言葉は出てきやしない。幼心に憧れる男女の関係が、男が女を当たり前前に殴って従わせるようなものであるとか、女が平気で嘘を重ねて男を騙し続けるものであるとか、もしも仮にそんなものであったとすれば今すぐにその幼児の成育環境を見直すべきだ。純愛だけが素晴らしいものだとはまでは言わないが、それでも時代時代の世間の常識と照らし合わせてみて著しくずれている思考体系——年上趣味とか貧乳嗜好などの性癖は別として——を持っている時点でつまり歪んでいる。

お前ってさ、何でいつもそうやって変な所に首を突っ込みたがるんだ。

そんな気は無いが端から見ればその通りだ。でも、正確に言えばやはりそれは微妙に違う。僕が積極的なんじゃない。むしろその真逆で本質的にはきわめて消極的なのだ。だからこそ、受け入れてしまふ、善くも悪くも。

彼の為なら私なんてと、彼女は誰が見ても美しいと感じるだろうその身を深い色水の底へと沈めた。言い寄ってくる女はみんな金目当てに見えるんだと、死に物狂いで働いて富を築いた彼は虚しそうに笑っては金で買った女を抱いた。あの人は本当は優しい人なのと、彼女は遠い昔の思い出に無理矢理すがっておそらく二度と来ぬ未来を願って今に耐えている。寂しい想いをさせたのは俺の方だからと、彼は全てを知らぬ振りをして血の繋がらぬ我が子を眺めながら妻に愛していると囁いていた。僕が出会ったその人は、己の弱さから目を逸らす為に、恋人の弱さを言い訳にした。そして僕は、彼女の心の凹凸に突き刺さって離れようとしなない男の楔を切り落とすとした。

どうしてこんな酷い事を。

柄まで血に濡れたナイフを片手に煙草を吹かしながら、彼女ならきつとそんな風に言うんだろうなと冷静に考えて苦笑した。

あなただけは私を裏切らないと信じていたのに。

そう言っただけは彼女は泣くだろうなと、足下に転がった男の死体に確信した。

「ああ、酷い話だ」と、最早、話し相手のいない部屋で独りごちた。

悲しい現実だが、人は知っていることしか願えない。そして願えることしか信じられない。だとすれば、幸福を信じられない原因は、幸福を知らないからだ。幸福を知っているにも関わらず誰も信じられない最大の理由は、誰かに裏切られた痛みを知っているからだ。けど何よりも悲しいのは、相手から信じられたいと想っているにも関わらず、それが叶う事は無いだろうと知ってしまったている事だ。

凹凸がひずんで固まったパズルのピースを分けるなら、どちらか一方を割ってしまったえばそれで片が付く。人は腐るほどいると言うよりも、人はこの世界を腐らせるほど沢山いる。余ったピースに美しく合致する相手は必ず何処かに存在する。ただ、それはもう歪んでしまった僕でないと言うだけで。

もうじき煙草の火も消える。空調の止まった部屋の上で煙が溜まっている。死ぬには決して適した場所でないだろう。だけどこんな死に方をするにはおそらく最もお似合いの場所だろう。

彼の血を体内へ入れるのは何となく躊躇われ、ズボンの生地でナイフをぬぐって赤色を取る。青いデニムに染みだした暗さをぼんやり見つつ、首筋に薄いナイフの先を当てる。

心臓の動きに呼応するように膝が震える。強がっていないと崩れ落ちそうで、競う相手もないのに涙を堪える。

何度も何度も彼女の名前を呼びながら、どうかせめてと、こんな愚かな行為でさえも報われる、そんな理想を信じようとした。

〈了〉